
月 刊

MéLange

Vol. 103



2015.06.28

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol. 103 2015.06.28

「月刊めづるじゆ」編集部

富 哲 世
ひ と 言 詩 評 6

結末

寺岡良信

風はもどかしげに
午睡に寄り添った
撃が削つたものは一本の流木
雨に抱かれた
六月の裸婦を彫らうとして
かなはなかつた刃に
浜昼顔の悩みが翳る
官能に行きつかなかつたのではない
陽炎にゆらめく
いのちの結末を
おまへは
彫つてしまつたのだ
潮騒も
蒼穹の滴りも
遙かに遡る風景
おまへの
もうひとつの目が
豊穡な肉叢のなかに
流木を見てゐたのだ

(月刊めらんじゅ102号より全行引用)

「月刊めらんじゅ」103号 目次

詩 & 俳句

古書薫る(俳句)……………高橋雅城 04
月……………岩脇リーベル豊美 05
雨ばかりが……………木澤豊 06
わたしはこの部屋で……………木澤豊 07
《見たことがある》……………上野 都 08
灰の蘇り……………有時秀記 09
道化師の残像……………千田草介 10
絶句もどき……………野口 裕 10
アナベル……………にしもとめぐみ 11
tea boutique……………月村 香 11
雨またはゆき……………御着かおり 12
花茎……………大橋愛由等 13
あやめ……………福田知子 14
トイレの用心棒が仰向けに／どぶの底……………中嶋康雄 15
真昼の月……………黒田ナオ 16
こんつえると……………富 哲世 17
マルグリットの記憶喪失学……………高谷和幸 18
ぶたのいることば……………大西隆志 19

連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評〈6〉……………富 哲世 03

神戸詞あしび92「民族の物語を共有する奄美の出身者」……………大橋愛由等 20

編集部日より★24/103回目の「Melange」例会は、読書会に木澤豊氏をお迎えして、好評の宮沢賢治語りをしていただきます。今回取り上げるのは、「タネリはたしかにいちにち囁んでいたようだった」。◆訃報です。「Melange」同人で、われわれ詩人仲間にとってなくてはならない友人である寺岡良信氏が、6月27日(土)午後2時18分、お亡くなりになりました。享年66歳。神戸港の満潮時(午後2時20分)に近い時刻でした。神戸を愛してやまなかつた寺岡さんらしく神戸の摂理とともに、旅だっけいかれました。二年半にも及ぶ闘病生活によく耐え、緩和ケア病棟に移ってから、詩友たちに律儀にお別れをして、身を潔めて生をまっとうされました。謹んでお悔やみ申し上げます。(大橋記)

ゆくことと振り向くこと。どこかで決算を窺いつつ書かれたようにもみえる。

けれど、この風のもどかしさとはなんだろう、衰弱的平静の水面下に寄せるついに解きえない、生きることの意味や、表出の謎だらうか。けれどこの詩は、海洋的エロスの豊穡のただなかにも、波に洗われた流木としてのその終の有り様を刻んでしまつたというばかりではない。そうばかりではなくて、差し迫つたこととして爾後を刻んだはずの終のすがたのうちにも、悠久の時間から振り返えられるようなことという、その場所に一度身を投げ出されて知つてしまつた生きることの官能が、そこにはいま揺蕩う海の豊かさのように確かに捨て難く余情している、そのことのもどかしさ、いわば死に宿命づけられた生きることそのものの、もどかしさではないだろうか。

わたしたちの願いを連れて、メシアンヴォカリーズのように、あなたの天使は苦悩の色を深めている。あなたはそれをこうして、生のもどかしさのなかに、受け止めようとしている。

潮騒も
蒼穹の滴りも
遙かに遡る風景

この三行がとてよく効いている、とおもつた。

※オリヴィエ・メシアンの「世の終わりのための弦楽四重奏曲」の第二章はヴォカリーズと名付けられている。クラシック音楽をこよなく愛する氏の、まろうど社刊の第一詩集の名もまた「ヴォカリーズ」である。

◆古書薫る

高橋雅城

二〇一四年度下半期まとめ 十五句

天牛を友と明治の本を読む
前衛は淫ら八月十五日
ここからはわたしあなたは秋になれ
しりとりをする少女へとこぼれ萩
きみはいま走る哲学ザクロ割れ
ここに俺ここに勤労感謝の日
霜月はちくわの穴の彼方から
のどぼとけ寒し極右の街にをり
霜夜宇津救命丸の小声たち
十二月柿の葉寿司が人情家
味の素なめてバカボン来る師走
ドーナツの穴のあたりに去年今年
冬座敷いろはにほへと母の留守
凧たいくつだけが知っている
眠気さすまたうぐひすを聞きてなほ

梅雨入前 十句

朝風やメトロノームのその先へ
そしてまた川面を広く夏燕
緑雨降る国会議事堂前に楯
晩年の初夏古書店に古書薫る
麦秋や8マンにも幸あらむ
リア王もマクベスも見た梅雨晴間
海遠くペンギン様にパナマ帽
十葉や脳の病いのその長き
とある町すずらん通り時分どき
ドラえもののび太ジャイアン原爆忌

◆月

岩脇リーベル豊美

世界は些細やかになったのに
月は
これほどまでに遠いものですね

お訣れ済んだ?と尋ねたあとには
和尚が葬式の準備をする
海の底は
月よりも遠く感じられます
こんな風に会いに来る人は
いつも夜露の欄干に降り立つのです

― 旅券も検閲も至上ではない
蜃気楼に映える港だが
海には海の
月には月の境域がある

DNAとよばれているものを確認したくて
たなごころを凝つと翳してみると
溺れよとだけ聞こえ
差引いた赤が残る血液を
泳ぎ切る魚 ―

あなたは聖霊降臨の夜
何で深海魚を歓待しますか

◆雨ばかりが

木澤豊

青い湯飲み茶碗に47度の泡盛を注ぎ
くちびるをつけた

屋根が映った液体の上に
細かい雨滴が入った

ここにわたしがどうしているのか
わからない

ここから木の階段の踊り場の窓が見える
窓の向こうは むこうまで荒れ野で

ヨモギや知らない草に混じって
うす紫の枯れかけた 花が光って

階段の窓枠も
傷だらけだ

ここに立つのは
どうもわたしではない

家族も友人もおもいだせない
窓から

降る雨が しきりに
さそって 少しさむい

行ったことの ない場所は
窓だった

私を囲んでいる きょうの窓に
鉄さびの倉庫の屋根が

弓女が織機の手を止めた
重い曇り空を

鳥がよぎった 一羽だった
かすかな潮と鉄さびの匂いのぎらぎら

窓の縁に大きな灰色の蛾の
羽の黒いまだら 模様

この数日 動かない
雨の匂いがある

わたしは 外に出たい
唇がひりひりするから

◆わたしはこの部屋で

木澤豊

午前二時 ひととき うちそとの音が途絶えているのに 空気が
かすかに波立っている
わたしもさざ波だった 夢とわたしはそれを見たのか 夢を見たのか
まだ窓が暗いうちに とんとんと大根を刻む音がするが
じつは そんなしあわせな風景におぼえがない

夢を見ていた
小さなホールに人がぎっしり集まっているが 知らない顔ばかりで
これ集会なのかなあ
オノさんがバッグをさがしてくれというので 怪しげな酒場で待つ
ている
テーブルの下には一生という資料のトートバッグ一つ
この袋は 外に世界を囲っている

大事なものは一カ所に集めておく 次々 忘れていくからね
いつの間にか 袋が重たくなった
会ったというより ぶつかったその人は
袋の外はいかがだったかと訊いている
サーカスの楽隊に夕映え 埃の匂いがある窓に
羽虫が乾いて張り付いていたつけ
偶然は発見だね

シロサワという地名だった

林のむこう サワっていつでも水なんて流れない
白い砂ばかりの広場の真ん中に火が燃えて 大きな鉄鍋で
白魚を茹で上げ 地べたのむしろに広げる
わたしがくりかえし生まれた場所だ
板戸の隙間から そんな景色が覗ける暗箱のような 畳が潮風で湿
った部屋の暗がり
だれが眠っているんだか 夢で眠るんだろか そこで 夢のむこうの
その部屋がじぶんだと気づいたのは 板戸の裂け目から漏れる陽の
せいだ

バッグより大きな袋のほうがわたしに似合う そんな場所がへんに
ひかっている
わたしって 誰が誰を呼ぶのか

袋は その麻布の外がわ 一生はそのなかで
意味のわからない集会にぞろぞろと 人が流れている
ぜんぶ移動しているんだよ どでかい海流さ
あれが黒潮だと教えてくれた岬の男は
ほんとうに親切だった

途中で立ち止まったみたいにな
いまは わたしは 荒い布目からこぼれてるけどな

わたしに他人のわたし ああ 他人の街であの男と
ジャズの不協和音降るまつただなかで あいつと目を閉じて
雨音を聞いた
それもゆめまたゆめの窓のむこう 大きな木の幹が人影になる
そんな日だったよ
で袋の中って聞かれると 窓を背に呆然とするだけだ

◆《見たことがある》

上野都

「兵隊は地図を見たことはありません」

浜田 知明

☆

慰問袋に入っていない 何度ひっくり返しても
もしやと 縫い目までほじめてみたが
かたく握りしめた鉛筆の
紙の二枚目に残した凹凸が そうだったか
やわらかく浮き上がった地図もどき

ずたずたにスコールにのめされ

声さえ届かない密林

前進と言う者すら 足が向くまま

百人が歩いて

すぐに 密林は閉じる

首筋に浮いた血管
細い道に見えなくもない
後ろに従うもののため

手を引かれ 転げ込んだ闇

闇という全方位

誰も教えなかったが

灼熱が三ヶ月のように照り込むところ

そこは下り坂だ

群青の海へ跳ぶ草むす野道の

「兵隊は地図を見たことはありません」

そう 言われたって

maps.google.co.jp/

見えすぎる分だけ

誰も見えないと

誰も腐らないと

誰も焼かれな

引用は 二〇一五・六・二三付け朝日新聞

「折々のことば」

◆灰の蘇り

有時秀記

その眼差しは、透視図法が指し示す〈場〉へ、私を
運ぶ。〈そのもの〉へ肉迫しようという眼差しの強
い意志が、幾たびも稲光を繰り返し、〈場〉が照り
かがやくが、しかし、このような仮想の〈場〉の果
実は痛みの向こう側にあつて沈んでいる。その仮
想性のゆえに。

それにもかかわらず、山頂から世間の家並みを眺
める眼差しは、侮蔑と慈悲の色合いをたたえ、痛み
の内奥へ参入する機会をうかがっている。痛みを
もたらすのは、迫害者の固執的視線であり、岩塊で
あり、知らない悪意であるが、眼差しはそれを溶解さ
せようと自らを光らせる。しかし、この参入が果た
されるには正統な秘儀性の滴りが欠け、欠けてい
るがゆえに、欠落の中に柘榴の実が落ちる。

いずれ時は満ち、陽が沈む。沈む陽の滴りとも
に、大陸と大洋の眠りと変相を超えて、内奥への旅
路が、深いメランコリーの様相を帯びるとき、山頂
の遙か上空を鷲が舞い、眼差しの導きとなる透視
図法はあまたの灰を潜り抜けるだろう。

正にその時、〈有る〉が、やって来る。内奥への参
入は光の乱反射とともに果たされ、灰は蘇る。〈有
る〉が灰の中からの蘇りとともにやって来る。滴り
は果実をもたらし〈有る〉という〈場〉を私と私た
ちにもたらす。そして、痛みを跳ね返しながら、滴
り落ちる時を飲み尽くす。痛みをもたらす岩塊は
溶解し、〈場〉の中で〈有る〉が滴りつづける。

◆道化師の残像

千田草介

黄色く上下左右に曲がりくねった廃道をアスファルトのめくれあがった破片につまづきそうに歩いているのはこちらへ行けという道標の指示に従うしかないから道の両側は切れ目なく防音壁の長城がこればかりは壊れたところなく延々と続いておりコンクリート製U字側溝に落ちてしまった亀と異なるところは憐れな有様にこのままでは早晚餓死か渴死かいずれにせよ道半ばにして(道程の半分まで来たということ)がわかるはずはないのだが)野垂れ死にする運命から逃れられないという諦念に憑りつかれかけたときマンホールの蓋を頭にのせた男(と見たのだが)が女だったかもしれない)のこれも道同様の壊れものがどす黒い血だか脂だかを口の端から垂らしながら片手をのろのろと差し伸ばしてなにやら無心するような仕事をするのに出くわしたので店の一軒とてないこういう状況下では使えない硬貨をわしづかみに口に放り込んでやつたら足元に落とし穴がひらいた。

◆絶句もどき

野口 裕

蜥蜴の喉がひくひくと鳴り
聞こえない音は目が聞く
額が捕らえた日の光
汗と化して睫毛の奥へ
すべてが痛い
炎天に走る驕馬のように
竹筒に残された記録は
四十万が生き埋めにされたと伝える

◆tea boutique

月村香

うんと具合が悪い日はしばらく死霊に囲まれたように鈍く鈍くわたしの視線が下に落ちそのままその目はさらにフードコートのコココーラの雫のようなものばかりふみしめているわたしは低血圧で困りますこうやって座っているだけでやっと生きておりますといったところで誰も信じてはくれまいねもうどうにもなりませんそういうときは書く内容よりも書く行為の方が大切でしょうきょうも文房具屋に行つて生シトロンを飲みましたおとといはあさつて見つけたばかりのティーラウンジに行きます必ず今晩はカデットの作るおいしいクッキーをおしよゆをかけて食べますのなどわたしの魂は遠い角度から怒っている

◆アナベル

にしもとめぐみ

アナベルが
咲かなくなったことにも
草々がはびこってしまったことにも
もう 関心がない
雨の降る音も久しく届かない
てててて ととん
てててて ととん
問いかける雨
もう 長い間答えられない
てててて ととん
てててて ととん
おいで
耳を澄まして

◆雨またはゆき

御着かおり

回転する寿司店舗を出ると小雨が降っている 駐
車場のライトに白く映しだされたそれは回りなが
ら落ちてくる粉雪のよう 雪が眼に入る夜 ゲレ
ンデではリフトがすでに終わり黒い木々に覆われ
ていた月の薄明かりにギャップが浮かび上がる上
級者コースの中腹 強い風の恐怖に立ちすくんで
いる 後ろから不意に押されて滑り落ちてしま
う瞬間 雪男の白い足だけを覚えてる

坂道を帰っていると 運転手付きの黒い車がウツ
ボのようにぬっと現れ驚く 白黒猫はくるりと転
がり愛想を振り撒いてくれたけれど ただ坂道を
登り続ける しご段の短い階段を駆け上がるとお
地藏さんに出会い赤飯を貰う まだ左側の坂道を
登る 大きな幅の石でできた階段を登った先にこ
んどは鉄でできた細い階段それも登りきる
部屋に着いた
皿は23時までくるくるくるくる回るだろう

雨粒は見えない細胞を膨らませている

小さな駅の町に引越した 海が見える場所なら
忘れてしまえるだろう 幅の狭い商店街がありパ
ン屋を過ぎると果物屋 向かいに居酒屋が2軒な
らびペットボトルのかき車をつくる豆腐屋は沖繩
豆腐も造っていた 古い家屋のクリーニング屋も
あるしそのうえそこは九官鳥が店番をしている
スーツ姿の人の流れを逆行し 四角い鞆がわたし
の膝に激しく当たったが 誰しも黙っている

◆花茎

大橋愛由等

薄い記憶のなかの
さびしい風吹く
コロンアルな
給仕が示した
夕刻という切れ目

のは
銀の
コンパスで
ヒヤシンスの花茎を
測ろうと
しているから

さき誇った
紫陽花は
ぼくが
余所見している間に
萎れの
修辭に
みたされた
ペエジに
読み進んでいて

うっかり踏んでしまった
影から
話しかけられたのは
異郷の
大地を
踏みならず
十二拍子を
踊る踊り子たちが
ひとびとではない
あなたに
見えるか
ということ

らんぎつな
机には
カラダのない
くねりが
座っていて
ぼくが
黙っていると
「ねえねえ」と
話しかけてくる朝は
去ってしまった
時刻表の
行方を

ようやく
と待ちかまえてみても
いつのまにか
時刻表は
去ってしまったのを
気づいたのは
六月の
不意の

ないても嘆いても
奇数で造られた
回廊の
眠たげな
柱の
畏から
抜け出せない
抜け出そうとしない

知っているのか
その後のことを
しゃべってくれるのか
今日の雲の
割れ目は
ひらひらしているのか

◆あやめ

福田知子

社の裏の森の暗がりの。土塀に沿って歩く雨あがり。木々の露が消えるころ。夕闇迫りきて。祭りの準備の時刻となる。笛や太鼓の音―生暖かい風に少しばかり。鷺や鳥の悲鳴の混じった空は。鈍いオレンジ色の血をうつすらと流して。まだ夏は始まったと云わんばかりに。薄明かりに溶けていった水辺の小動物や虫たちの。声の入り口の草叢の奥に。あやめ色の水を湛えた古池があった。ここらあたりの草叢に足踏み入れ。そおろり足を踏み入れるたびに。群がり刺す蚊や蚋に悩まされつつも。その猫たちの佇まいが親近者のそれに似て。いわく言い難い懐かしさに奇妙に囚われた。だから猫小母さんがやってくる時刻まで。草葉の陰でじつとその様子を眺めているのが日課となり。蚊や蚋に刺されたふくらはぎは赤く腫れ。日毎に嵩を増して固く腫れ上がり…の繰り返し。こうして日々耐えているのに。これが夢の中の出来事であつては口惜しいから。頬をぱちんと叩くほどに。ふくらはぎの痒みと痛みはいや増し増して。現実の蚊と蚋と草叢とあやめ色の池が。目の前にただに広がっている。ここに猫たちは毎日やつて来ては。餌を貰つてその数を増やしていく。猫たちは痒くないのか。どんどん膨れ上がるふくらはぎ。赤黒い猫たちは。渦巻模様を作つて近づいて。私は。ふくらはぎを真つ赤に腫らして痒痒がつている。この足にもこの手にも。猫小母さんを期待してすりすりしてくる猫たちを撫でると。しゃがんだ足の付け根にも草叢のざわめきが纏いついて。離れなくなつてしまふこの手もこの足も。ついに猫にやつてしまおうかとしゃがみこんで四つん這いになつたところに。頬かむりした本物の猫小母さんがやつてきて。胡散臭そうな流し目で一瞥。その日も次の日もまたその次の日も…。私は四つん這いになつて待つ。もうふくらはぎは痛くも痒くもない。そうこうしているうちに。とうとう祭りの日になり―小暗いあやめの浴衣姿で猫小母さんはやつて来たのだった。

◆トイレの用心棒 が仰向けに

中嶋康雄

トイレの用心棒が仰向けに
ひっくり返つて死んでいる
埃をかぶつて乾いている
よれよれのTEEシャツをきた
老女が便器に座っている
便器が大きな複眼になり
老女の眼球が次々とこぼれ落ち
巨大な羽を探している
水を噛み砕く音が鳴り響く
薄汚れたビニールが
眼球を包装しようともがいている
眼球は熱い空気をはき出している
ビニールをとかしている
真つ黒い煙が支配にこだわる
巨大なベビーカーが待ち受ける
便器は待ち受けられて困っている
新聞が配達される
記事がやせ細つて空を見上げて

いる
老女がそつと読むふりをする
トイレの窓から見える雲が
老女の堅い便を盗み食いつける
便には剛毛が生えている
老女のTEEシャツのデザイン
から
インド人がぞろぞろ出てくる
インド人はしゃべりながら出てくる
インド人は途中でインド人でなくなる
ただモヤモヤとそこにあるだけになる
ただモヤモヤとそこにあるだけ
になつても
しゃべり続けている
雲が食べ残した老女の堅い便の
剛毛が
ただそこにあるモヤモヤを
食べ始める
トイレはますます臭くなる
便器の甲高い永遠の笑いに
新聞配達人がよろめき
新聞が便を破り不思議な光を放つ
印刷された文字がニョロニョロと
配列と構造を変え
読めない文字になる
読めない文字がピタピタと
読めない文字がピタピタと

◆どぶの底

中嶋康雄

老女の顔に張りつき
老女の少ない水分を吸い上げる
老女が少ない水分を取り返そうと
読めない文字を顔から無理矢理
引き剥がし
歯のない口に押し込める
読めない文字が老女そのものを
読めなくしてしまう
老女はトイレの中で読めない
まま
読めない大便と読めない尿を垂
れ流す
居着いたような気もするが
貧乏神が毎日寝に帰ってくる
ああ、鉦の音
すつからかんの行列三昧
すつからかんの行列三昧
と踊り暮らす蒙昧の畏で
においの魔窟の恋しきで
ふりきれない妙な満足が
甘つたるい醸成を繰り返す
遠い民謡やまやかしのハードロ
ックが毎日を彩り
飯の腐敗を忘れさせる
ああ、脳みそが溶けるほどの廻遊
萎びた王様が
パンツ一丁で女を騙す
小さなゆがみが落ちてくる
ゆがみはそのまま居座る
そこいらを浮遊するゆがみが
やつとの暮らしの浄財を剥がし
うすら寒さが体まわりをゆらゆ
ら漂う
わけのわからないあらゆる誘惑に
皺だらけの手をそつと引き抜か
れる
もつと皺だらけの
すこし小さめの手がすぐ生えて
くる
どぶの底にいと安心してしまふ

◆真昼の月

黒田ナオ

バスを待ちながら
見上げた空に浮かぶ
白く透明な月を見ていた
その小さな形を
胸の真ん中あたりで浮かべていると
すぐ後ろに並んでいた男が
黒い革手袋をはめたままの手で
真昼の月を指差している
いつの間にか
男の姿は消えて
ただ背の高い鉄塔だけが
私のことを見下ろしていた

声が聞こえてくる
まだ鍵が見つかからないのと
泣き叫ぶ子供の声
突っ切っていく送電線から
私の所まで伝わってくる

感情が見つからない
捕まえようとしても
また何処かに
するりと抜け落ちて

バスはいつまで待ってもやって来ない

並んでいた人たちは

ひとり

またひとりと

何処かへ帰っていく

帰る場所を持たない私は

気がつくといつも

半分だけ宙に浮かんで

ゆらゆらと揺れている

◆こんつえると

富 哲世

業務スーパーで買ったというアップルタルトを
ドイツからもらわれてきた
三輪の花と羽ばたく青いてふてふの絵柄
の明るい
ティーポットの輪郭をした陶器の小皿に
だいじに載せた
日射しはまだやわらかく
みどりの翳りの庭からやつてくる風も時
おりカーテンの裾をもちあげ
ユーチューブのショパンが流れている
まだ訪ねたことのない
こんつえるとという詩を書きたいとその
時ふいにおもった

鳩のフンの落ちていた

川沿いの喫茶店
影の揺れる

ほの明るい午後のテーブルをはさんで
まだ醒めぬ夢のような慰めに
耳かたむけている

どれくらい？

そうやな、

この、焦げたコーヒーくらい

ことばよりも広く

大きい音楽が

そうではない そうではないと

ことばのとなりの

空席を埋めてくれる

けれど

牛のように失うことばを灯しながら

釣り人のように

糸を垂れて溢れくるものを待ち暮らして

いる

古いあした

おれたちの 千年

もつとずつと

どこまでも連れていきたいねえ

ホドロフスキーの午後もチャイコフスキ
ーも

ロッキーホラーショーもまばゆいこだま
となつて消えてゆき

猫のポムは爪とぎにマタタビを振りかけ
てもらい

ひと暴れたあとえりまきのように
扇風機の下で眠ってしまった



◆ マルグリットの記憶喪失学

高谷和幸

かくのごときが、1907年12月10日(火)にマイム役者マルグリットによって素描され組み立てられたものに対しての著述である。「妻殺しのピエロ」の仮面の独白、仮面のつねに仮面の向こう側に続いている空虚である存在。鍵盤をたたく仕事、息を吐き出すような長い管の震え、仮面の表面から立ち現れることがない、裏側にあるものがそこにとどまっている。どこか分からないが危険である、なぜそれは懼れを覚えるものだろうか。逆に仮面の目から見えるもの、そこには回避できない厄災がわたしの思念にあるように思う。わたしがわたしであることを知らない、そのわたしだけに罪。あらゆる運動の中に秘められた、いつ芽吹くか分からない邪な語法への思惑。われわれの記憶回路を一時的に麻痺させるもの、それが仮面とわたしたちの間にあるいまだ書かれていない愉悅の沈黙にちがいない。著述した者によればマルグリットは6月の雨が、つねに午後になると消えて行く音楽の譜面を思った、ただ白いそのページに降りかかる雨だと感じていたようだ。顔に降りかかる平面の雨。平面的、平面化。この同時に辱しめられた音楽。このわたしと言うことの意味は表面が消え失せたとしたら、おそらくは記号のばらばらになった残滓しかないのだろう。表面の上に凍えたジャーゴンたちの奏でるプロソディの雨粒。機能を奪われた仮面に欠如した耳は、その先にある時間を、内耳に直結した紐つたいに、向こうからうごめく桎梏の音素を聞いている。どこまでも表面を滑っていく、横へ横へと、または上へ下へと。

消えた言葉

(だが、いつまでも決して仮面の奥へ届かない雨に。)

◆ ぶたのいることば

大西隆志

暮しはぶただらけ
買いたものに行っても
買ってぶた
過剰包装してもらってぶた
無駄使いになってぶた
財布の中にも
聞いてぶた
失敗をやってぶた
言ってしまったと、言うてぶた
ぶたなどこの土地の言葉にはない
友人が話してくれたが
ブタは脚韻にやどってぶた
空からぶたは降らないが
口からぶたがもれてもた、と
もたがぶたにかつようへんかしてぶた
他人をことばでぶつことに
カタルシスを感じている贗ぶた野郎は
紅の飛行機乗りのように格好良いぶたの鼻息でぶつ飛んでいく、ぶうー
ぶたはことば
ぶたは食べ物ではない
何でも咀嚼してしまうぶた
ことばを真つ直ぐにさしだして
ぶたの舞台をかがやかせる
行為をごまかさな
ぶたは平和な場所にいる

ところで、2番目の著述家がマルグリットの仮面の独白について、平面とそれにつながる派生的な表現はすべてを平面的にする、または平面化すると書いている。しかし思うのだが、ただ単に平面であることがなぜかくもマルグリッドを引用する者によって貶められてきたのだろうか。――木や風のことを聞く、ただ耳をすますだけなのに――パリの雨雲の下を土でよごれた燕尾服を着たボードレールが「すっぱいぞ、すっぱいぞ」と歌っている。酔っ払いが歌っているようだ。観客の、爾余からのいささかジャパウォキの怪物風の出現ではあるが、「無色の緑の観念が猛烈に眠る」そのような記憶喪失学のねじれた平面を莫迦にしてはいけない。平面に向かうところの、いやそれさえも意識に上らない、無意識の襲にある途中に置き去られた不安と危機感。アメリカに着きもしないし帰還も果たせない幽霊船のような、そのような閉鎖的な繰り返しの文法は音素の流れ。「スッパイゾ。スッパイゾ」は意味を語るがそこには鳥のように存在しないもの。雨が雨を引き裂くことで発する音。それが平面ではないのかと2番目の著述家は言う。平面の向こうから投射装置によって部屋の隅の壁に映し出される玩具の点景、そのための見慣れたものの喪失。引きずり出された無意識のメタファーとしての仮面の、引用という絶体の虚無が平面なのだ。したがって平面は行為の、行為そのものによるパントマイムであって、観客の誰かに対して現前するかけ引きではない。球体をした鏡に映る、ディスクの縁に無限に沈み込んでいくマルグリットの記憶喪失学。

消えた譜面に蝟集するもの

2番目の著述家のあいだを滑っていく平面の雨に

(平面とはキャリーバッグを持つバス停の女だと言われている。ところであなたがたつた今想像したそれは平面の平面性に過ぎない。実際には平面は髪の毛のちぢれたチョコレート職人だと言われているのだから。)



盛り上がった第二回徳之島一切節大会のようす。2009年

民族の物語を共有する奄美の出身者

関西学院大学総合政策学部の山中速人教授の招きによって、六月二十五日（木）、山中ゼミの授業において、「兵庫（関西）に生きる奄美出身の人々の歴史と今」とのテーマで一時間ほど奄美について語る機会が与えられた。

私の奄美への関わりは、いくつかのチャンネルによって成り立っている。今回は、奄美出身者でも二世でもない私がどのような経緯で奄美にかかわってきたのか、そしていまだのように奄美にかかわっているのかをまとめて語った。

発表では、関西における奄美出身者の特質を五つ列挙した。①関西には約30万人の奄美出身者がいると言われている（奄美群

島の住民は12万人なので関西の方が多い）。

②奄美出身者はエスニックテイ集団を結成している（集住地がある。盛んな愛郷団体活動〈郷友会〉を展開している）。

③ひとの移

動は文化の移動も付帯する（文化移動の表象のひとつとしてのシマウタ（島唄）の紹介）。

④奄美出身者にとつての存在意義は復帰運動にある（奄美は戦後八年間（1945-1953）米軍政下にあった）。

⑤奄美につねにアイデンティティに揺れている（地政学的な位置からくる奄美の特質）。

神戸はこの都市が近代になって誕生していろいろ多くの地域からの移住者によって形成されてきた。そのなかでも、鹿児島県の奄美群島からの移住者は、ふるさととの軛帯を厚く保ち、愛郷を趣旨とする郷土会が多く存在し、盛んな活動を展開している。奄美出身者が郷土会の役員をするなどして積極的に活動することを「しまさばくり」といつている。

奄美出身者の大きな特質として、先の五つの要素以外に〈奄美出身者は自足した民族の物語の中に生きていく〉ということも上げておこう。有史以来、つねに奄美は他者によって統治されてきた琉球／薩摩／鹿児島／アメリカ／日本）。奄美群島は地政学的にみても、北の（薩摩／鹿児島）、南の（琉球／沖縄）という政治・軍事・文化・経済といった諸分野における強者には生まれ、翻弄されてきたという歴史を持つ（島尾敏雄はこうして大国に挟まれ所屬が変移してきた奄美を、ドイツとロシアに挟まれた東欧のポーランドと似ているものとして認識していた）。つまり奄美とは、ある時は鹿児島であり同時に鹿児島でなく、またある時は沖縄であり沖縄ではないのである。この繊細な心もようが、永年にわたって奄美の人たちの心象を形成してきた。つまりアイデンティティのゆらぎにさらされているのである。

こうしたゆらぎを超えてゆく装置として、自分たちが深く信じる〈民族の物語〉を創出してきたのである。その自足した物語は他者から相対化されることも、内部から異見がだされることも、好感を持たない。そしてそうした異見は排除か無視しようとする。こうした統覚された意思を共有するメディアとしても郷土会は機能しているのである。

詩と評論

月刊「Mélange」Vol.103

神戸

2015年06月28日 通巻103号

発行所／月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）

maroad66454@gmail.com

定価 600円(税込)